書き抜き読書ノート 2420	2021 年 7 月 7 日

木原武一著「天才の勉強術」新潮社 1994 年 6 月 1 日刊を読む

天才の学び方（７）ピカソ

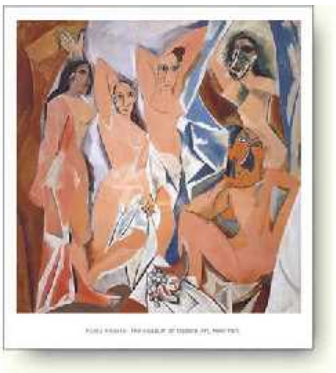
・あなたは画家としてどんな勉強をしてきましたか？
「毎日、毎日、絵を描くことだ」
「その人が何者であるかは、一日の大部分の時間を何をして過ごすかによって決まる。毎日、毎日、同じことを続けるうちに、人間は善かれ悪しかれ何者かになっていくのである」

・「もの心ついてから絵を描きはじめ、ほとんどすべての時間を絵のためにささげたピカソは、14 才にして生涯の傑作を描いてからも、ほとんど休むことなく描き続けた」

・ピカソの「勉強術」の秘訣は、ただひたすら絵を描くことにあった。
・他人の絵を見ることも重要な勉強の１つ。
・13 才のとき父親からもう教えることはないと言われた。それ以降は、自分一人で学ぶしかない。たくさん絵を描くこと、そして、たくさん絵を見ること。ピカソは足しげくマドリードのプラド美術館に通ってベラスケスやゴヤをはじめスペインやヨーロッパの名画、偉大な画家たちの作品を研究した。美術館こそピカソにとって「学校」であった。
・19 才のときにはじめてパリを訪れ、やがてパリに住むようになった。はじめからパリそのものが彼の「学校」となった。パリの美術館や画廊でゴッホやロートレックの絵にはじめて出会い、その影響を強く感じさせる絵を描いた。

・他人の作品を研究し、他人の流儀を取り入れるというのは、大切な勉強だった。独創的に見えるピカソの作品もいろいろ調べてみると、他の作品に似通ったものが少なくない。有名なゲルニカについてもいくつかの典拠が指摘されている。
・独創性や個性をことさら強調する現代の教育の風潮のなかで忘れられがちなのが、真似する能力やものごとを鮮明に記憶する能力である。こうした能力を高めるにはどうしたらよいか。たくさん真似して、たくさん記憶するしかない。
・ある能力を高める最善の方法はその能力を酷使することである。
・ピカソは、一度見たものはけっして忘れず、必要に応じてこれを自由に再現することができ、意識的あるいは無意識的に自分の作品に応用した。これも画家にとっては立派な「学習効果」のひとつである。
・ピカソは「キュビズム」の様式を彫刻から借用した。「キュビズム」は、「キューブ（立方体）によって絵を描くところから命名された」
・ピカソが考えたことは、「立体をいかに平面に再現するか」という人間が絵というものを描きはじめて以来ずっと考え続けたことにほかならない。

・簡単に言ってしまえば、ピカソは、彫刻の真似をして絵を描いたのである。塑像をかたちづくるような気分で絵を描いたのではなかろうか。



＊キュビズムの様式の最初の作品である「アヴィニョンの娘たち」を描いた 1907 年の 2 年前あたりから、ピカソは、彫刻作品を手がけ、スペインの古い時代の彫刻に大いに関心を寄せていた。

・「模写」はピカソにとって重要な仕事の一部である。名画の「模写」は画家の練習法の 1 つである。

・ピカソは、「模写は自己の訓練であり、修業である」と言った。

・ピカソは、訓練としてはじめた模写を習作として終わらせないで、原画を連想させながらも、ピカソ独自の世界を表現した作品へとつくり上げている。

・ピカソは、1 つの原画をもとに、たくさんの連作を描く。たった 1 つの素材をもとに、100 点以上もの模写を描き上げることができるのは、たいした変幻自在の才能である。79 才のときに「マネによる草の上の昼食」、マネの絵を模写しながらピカソは 100 点以上の連作を描き上げた。疲れを知らぬ飽くことのない創作欲であり、訓練であり、勉強である。

・「私は立ちどまりはしない」